

# 彙報

## ●「史學」の發刊

慶應義塾大學部史學科を中心として組織せられたる三田史學會は今回雜誌「史學」を發行することとし昨年十月其の第一卷第一號を發行せり同號には田中萃一郎氏の「希臘の二大史家」橋本増吉氏の「古事記及び日本書紀の研究」を讀む「占部百太郎氏の「中世紀に於ける英國の王職」飯田忠純氏の「回教法制の源流」以下九篇を收め「東西新史乘」欄内には東西の新刊書を批評紹介せり、吾人はこゝに斯學研究の有力なる季刊雜誌に接して吾人の好伴侶を得たるを衷心歡迎するに共に其將來の發展を祝福して已まざるものなり。

## ●大藏會

毎年秋季に於いて催さる、京都佛教各宗學校聯合會主催の大藏會は昨年十一月六日大雲院内家政高等女學校にて其の第七回の展覽會を開催せり今回の陳列は大藏經刊

行の殊勳者として福田行誠上人及び島田蕃根居士を記念せんが爲め、兩氏の遺蹟遺品を主とし、併せて古版佛畫及び高野山金石拓本を展觀せり行誠上人に關するものは主として上人の自畫自詠の講讚類にして蕃根翁の遺品には縮刷藏經印行に關するもの古寫華嚴經以下多數の聖教及び修驗道關係圖書等あり聖教の内には高辨の自筆を覺しき如來遺跡講式一卷先づ注目に價すべく修驗關係圖書としては慶長年間の入峰日記及び行智阿闍梨自筆の理源大師傳略頌並びに鈴掛衣は吾人の注意を惹けり古版佛畫には弘安十年版の傳法正宗定租圖卷及び應永二十一年版の融通念佛緣起繪等あり高野山金石拓本としては福島正則寄進の國文の鐘銘拓本皆珍にするに足れり當日午後同校に於いて「行誠上人を追憶す」〔文學博士南條文雄〕「島田翁に就ての感想」〔文學博士狩野直喜〕「島田翁を懷ふ」〔文學博士内藤虎次郎〕の講演ありたり。

## ●京都帝國大學文學部卒業論文

京都帝國大學文學部本年度卒業生の提出せる論文中、史學に關係ある題目及提出者左の如し。(△選科生○委託

(生)

史學科

國史專攻

鎌倉時代に於ける庶民教化

○江藤 徹英

東洋史專攻

王氏高麗の衰滅に就いて論ず

△中村 知

西洋史專攻

英國の三C政策につきて

朱 秩如

カルル一世時代に於ける英國革命の由來

△陳 階之

地理學專攻

日本海に於ける海岸進化の一型式

小牧 實繁

哲學科

印度哲學史專攻

釋尊を中心とする原始佛教僧團の研究

果 敬照

親鸞の往牛淨土の行證觀に就て

禿 了信

心理學專攻

祈禱の心理

岡 道固

倫理學專攻

ギルド社會主義の倫理的研究

宮城 敏夫

美學美術史專攻

希臘悲劇の起原

△林 達夫

社會學專攻

ヴントの民族心理學に於ける社會進化思想に

就て

埴岡 信夫

文學科

國語國文學專攻

岩崎本日本書紀調點研究

△小中 正晴

支那語學支那文學專攻

詩人白樂天の研究

△水野 平次

●史學研究會

例會

昨年十月十二日午後一時半より文學部第六教室に

て開催左の講演あり。

### 黄河々道變遷の地文學的考察

會員 文學士 藤田 元春君

本誌に掲載せるを以て略す

兜の沿革に就いて 會員 關 保之助君

我が邦に於ける甲冑の記載に見ゆる最古は常陸風土記に見え日本書紀神武紀にも介冑の土の名見ゆれば其の起原は神代にあるべく明珍系圖に武内宿禰に創まるこあるは信するに足らず彼の天書は元より偽書なるも神武帝が千束鹿革を以て甲冑を製せしこ謂へば元來は皮革製に起原するものなるべく所調龜の子冑は之より由來するものならむ臺灣生蕃人の甲冑實に之に類しシンガポール博物館にもボルネオ出土の同様式のもの藏せらる 惟ふに龜の子冑は訶和羅なるべし之に伴ふべき兜は皆前方を尖端とし矢を外らすの便に供す此の形式は平安朝にも傳へられ彼の小ザネにて組み製するは支那風に基けるものなり云々

總會 十一月十九日午後一時より京都帝國大學々生集會

所階上にて開催先づ濱田評議員より會務會計の報告ありて左の講演に遷る

### ラペルーズミ樺太半島問題

會員 理學博士 小川 琢治君

西洋の地理學者が何故一時樺太島を以て半島なりと考へ間宮林藏の島説に驚かされたるかこ謂ふにこれ實測探險の不充分なりしが爲めにてフリースの探險以來一七四一年、一七七八年にそれ／＼ペーリング、キアブテンクックの兩探險ありしも未だ之を闡明するに至らず然るに其の後露西亞の東方政策着々として進み其の勢力カムチャツカに迄及ぶや探險者にも便宜を齎らしラペルーズはブレスト出發以來南米の南端を經過して臺灣の紅豆嶼に觸れ能登の七の島より沿海州岸に達し樺太の南端を廻り意外の成績を挙げ得たり此の一七八七年の探險は西洋人の間宮海峽に達せし最初にして従つて一七八八年に出版せられたる地圖を其以前の一七三二年、一七七二年、一七八二年の所謂ダンビールの地圖に比較すれば其の正確の程度驚くべき程進歩しラペルーズが十八世紀末の東亞地理

學上の大功獻者たる功は千古不磨なるべし彼は其の末年所在不明となりしも四十餘年の後に於て其の末路の地發見せられ其の遺物は今やルーブルの誇きなれり然るに従來の地理學者は彼を以ても樺太半島説の者の中に數ふるも彼の報告書を熟讀すれば彼が樺太島嶼説なりしを知るに足るべし云々

右終りて評議員の改選を行ひ次で左の講演に入る

我が上代に於ける支那思想、特に道家に就て

會員 文學博士 黑板 勝美君

佛教渡來以前の神祇崇拜に其の經過を彩色せる何者かの存在すべきは想像に難からずして支那の影響又は大陸の影響あらむは論を俟たず王仁は姓氏錄にては支那人にして想ふに王仁一家の研究は此の問題研究の主要部分なり延喜式祝詞の中に古來の形式と異なる呪文あるがこれ明かに支那道家思想の影響せるものにして阿知岐の子孫たる東史部、王仁の子孫たる西史部の人々之に參與し中臣稜の外に道家思想に基因する此の呪文を併せ誦せしを知るべし其の文句中に見ゆる東王父、西王母は河内松岡

山船首王後の古墳中より發見せられし鏡鑑の模様に明示せられ従つて所在に發見せらるゝ神人鏡は皆道家由來の思想を示せるなるべく又銀人を以て災を除くこゝも支那傳來の思想たるや論無からむ想ふに道家思想と我が古代思想とは先天的に相調和すべき特性を有せしものなるべく神道なる語も易の繫辭傳以下文心雕龍にも見ゆれば我が古代の神ながらの道とは支那より來れる神道其の者の意にして主として道家思想に基く神祇崇拜を意味せるものには非ざるなきや諾冊二神の天照大神月讀命を生まれし傳説も老子疏に左日王父、右日王母とあるに符合し常世國へ田道間守の行きし話は勿論、大和武尊の白鳥傳説は道家の尸解説と應じ雄略帝が葛城山に獵して長人を見たる話と能く道家の思想と通ず彼の行者は道士にして葛城山は道教の中心地とも觀られ得べく雄略帝の頃道家思想は頗る盛大にして、これがやがて我邦固有の神祇崇拜と混合融和せしものならむ歟云々

右終りて午後五時茶話會を催し同午後六時より更に席を階下に移して晚餐會を開き和氣霽々裡に午後九時散會

せり當日會場には小川博士の講演に關する幾多の史料を展觀せり猶評議員十名は總て再選せられ今西阪口三浦評議員は編纂擔任、矢野評議員は庶務會計擔任に就任せられたり

例會 二月四日午後一時半より文學部第六教室にて開催

左の講演あり

一唐の均田法に就いて 會員 文學士 岡崎 文夫君

均田の名は漢代より存するも所謂均田法は晋代に源を發し而して明白なる目的を以て此の法の定められたるは北魏なり之が愈々發達して唐代に完成し同時に破壊せられたり法中自賣、遷移を許す條項あるを以て古の井田法と異なるものなりとする者及び唐代の特色なりとする者あり而して唐書に見ゆる戶籍法は隨分疑問も存すれども兎に角戶籍を整理して租入を計るを以て目的とし兼併を防ぐ主旨とせるものなりこれより來る租入の外稅錢と地稅とあり之と相並びて均田法行はれ天寶時代の歲入より見れば均田の租入よりも地稅の方のそれ多く且つ地稅の課せらるゝ處に隱戶少なきに反し均田制の行はるゝ處に

は隱戶多く爲に此の法の實行の程度を推し得らるゝなり但此の法は舊來の稅法と相並びて行はるゝ爲唐初の社會に一般的安靜を與へしこゝは看過すべからざるこゝなり云々

一歐米漫遊談 會員 文學博士 新村 出君

今度の視察旅行は歐米に於ける圖書館の設備其の他之に關する方面を主眼とし専門とする言語學的方面を副としたるものなるが先づ米國に到るやワシントンの議院圖書館にてス井ングル氏蒐集の支那地誌乃至本草書類及び故ロツクヒル氏遺愛の諸書を調査し次で英國に渡りてロンドン大學の新設史學研究室の設備を見る該研究室は戰後の經營に係り質素を旨とし其の木造平屋造りの有様は髣髴として我が京大文學部の木造研究室に似たり昨年七月中旬此處に於て英米史學家大會開催せられロンドン大學を中心として史料蒐集の議起りしが英國の地方大學の反對に遭ひロンドン大學のみを中心として蒐集するこゝは中止せられが兎に角興味ある大會なりき次にロンドンなる大英博物館及びオクスフォード大學の兩圖書館にて

耶蘇會士の著したる日本語書類を調査し大陸に渡りて後は巴里、ハーグ・ライデン・ブラツセル、アントワープの諸圖書館に藏せらるゝ日歐關係史料を調査し其の得る所僅少ならず云々

● 讀史會

例會 昨年九月三十日午後六時より學生集會場に於て開催出席者喜田教授中村學士岩橋森下源江藤中村井川勝峰加藤佐古土田諸君にして先づ東京商科大學に出講中なる三浦教授よりの書信を朗讀し次に左の講演ありて十時散會せり

一、本地垂迹説と反本地垂迹説 岩橋小彌太君

本地垂迹説は本來神祇を佛菩薩の權化とする本高迹下説より佛菩薩即神祇といふ本迹俱高説に向上し佛教の墮落に因る教理の無理解と共に本邦固有の信仰の熾盛となりし結果遂に本下迹高即ち反本地垂迹説となるが其は吉田神道の創稱に非ずして既に應永以前に天台家の中に此の思想を抱けるものありしことを論證せられたり

一、或る個人の花押について 文學士 中村 直勝君  
或る個人の花押が其の大小用紙書場所地位家柄身分(公武)の差異によりて略概括し得らるべきことを前提として足利歴代將軍の花押の共通的變遷が亦身分地位の向上に伴ふことを立證し細川管領豊太閤にも論及して精密なる花押の研究が更に心理學の補助を得るに於ては個人の性格と其内面生活をも考察し得るに至らんかといはれたり。

例會 十月二十一日午後六時より學生集會場に開催出席者三浦教授魚澄中村下川牧の諸學士及び源江藤中村井川末岡勝峰佐古加藤の諸君にして左の講演あり九時半散會せり。

一、鎌倉時代に於ける反念佛思想 源 豊宗君

先づ念佛信仰の思想發達史より説き起して念佛者行儀に對する批難專修に對する批難念佛易行なることの批難を述べ參禪學道を忽にすべからずといへる道元禪師の學道用心集を擧げ翻て當時の思想を論じて武家の簡易を好むむ尙武的力行が自力難行宗を選ぶに至れることに論

及せられたり

一、左女牛八幡宮

文學士 魚澄總五郎君

源氏にゆかり多き此宮は初六條若宮と稱し頼朝の尊崇を受け足利氏も尊氏を始め歴代信仰厚く醍醐三寶院門主其別當となり社運の隆盛は石清水北野に劣らざりしが其後應仁の兵火に罹り慶長の頃今の五條阪に移されたりしこゝを文献に徴して述べらる

一、感想

文學博士 三浦 周行君

最近東京に於て開催されし史學會大會印刷文化展覽會鐵道五十周年記念博物館に於ける印象や近時の文化史的風潮について感想を語られ最後に近衛家の古文書記録の主なるものを紹介せられたり

實地調査 十一月二十日午前八時秋空高く澄める時洛北

に向ふ一行は三浦教授魚澄中村牧學士及び橋川森下中村井川勝峰加藤の諸君なり偶入洛中の松本學士亦參加せらる先づ詩仙堂に到れば四邊閑寂にして楓樹の錦繡は庭上の白砂と相映じ丈山の温容を偲はしむ先づ探幽筆丈山自贊の壽像を拜して堂内隈なく見學せり六勿銘を初まして

丈山自筆自作の隸書額は到る處に掲げられたるが壁間に

垂れたる七箇條の覺書は優に隱士の豪懷を窺ふべし遺愛

品多き中にも三十六詩偈の板書は其尤物たり詩文景詣の

法帖を見る詩仙堂記は羅山子寛永廿年冬の作になるもの

陳元贊與石丈山書牘は又稀觀なりとす。午前十時辭して

曼殊院を訪ふこゝにては寶庫を開放して一行の調査に

便せられたれば三浦教授の指導の下に仔細に古文書記録

を閲覽して晷を移せり當院の北野別當職に關する文書

には足利將軍の自筆に係る者多きが義高の明應五年の起

請文中七月四日のものに袖の袖の上部に於て血痕を印せるを

見るは血判の研究上注目すべし又慈嚴僧正の裏判ある曼

殊院門跡讓狀に北野社領を列記したる中周防天神宮出雲

天満宮を載せたるも面白し慈圓僧正の消息中生家なる九

條家の優越なる由來を語れるは彼れの性格を想ふべし天

海の書狀に明曆の江戸大火の事を述べて「能且那持候間

何共不存候御一笑く」云々といへるものあり彼れが其

當時徳川家の信望を負へるを想うて一行覺えず破顔せり

其他傳法血脈並天台圓教菩薩戒脈傳燈順は傳統上の好資

料なり尙諷誦文縁起物諸講式等の史料に供すべきもの頗る多かりしも今は省略に従はん既にして暮色漸く迫りたれば他日の調査を期して歸途に就きぬ

**第十二回創立記念大會** 昨年十二月三日正午より學生集會場に於て公開し國史上の重要問題に關する會員各自の新研究を發表するに共に近世に於ける日鮮交通に關する珍貴なる繪畫の陳列を行へり午後一時學生末岡覺雄君開會の辭を述べ引續き左の講演あり

家光と武術

文學士 下川 潮君

冒頭鎌倉時代にも將軍執權等の武術を獎勵せしことを説き徳川時代に入りては家康家光吉宗の三人は特に之を勵まし自らも曉通せし事を述べて本題に入り家光は柳生宗矩等に就きて武道の型に達せしのみならずその精神をも體得せりて一々實證を挙げ最後に人口に喩突せる寛永御前試合は全く元祿以後の僞作なるを詳説し而かも斯る僞作を生ぜるは家光の武道を好める事に原因せるならん云々

大名領地の成立

文學士 牧 健二君  
法學士

こゝに所謂大名とは戰國時代をさすものなりと限定し次に樵談治要を引きて當時の守護の性質を説き尙鎌倉の初期守護の創設せられしより戰國末に至るまで其變遷を述べ守護はも職にして分國を領せるにあらず鎌倉末より天下亂るゝ及び漸次土地を領して其分國の支配權をも有するに至れるなり云々

足利時代の京都

文學士 魚澄惣五郎君

足利時代が武家の最も公卿化せる時代にして人は皆漫に新奇のものを追ひ殆んご理解せらるゝに至らざりしこゝより應仁の亂前後の京都を説き京都の市街が足利初期は室町幕府を中心として東北部に發展せしが應仁亂當時は火災頻りに起り全都殆んご廢頽に歸し亂後秀吉の時に至り整理せられ現今に於ける京都市街の基を作れり云々  
幕末に於ける海軍の創設 文學士 古田 良一君  
日本の「カバネ」に朝鮮の骨品

文學士 今西 龍君  
南北朝の合體條件 文學博士 三浦 周行君

以上の三講演は並に本誌に寄稿せられたるを以て其梗

概を略す講演終りて後學生勝峯月溪君閉會の辭を述べ拍手の裡に散會せるは午後七時なりき當日陳列品の主なるものは京城塚原龍太郎氏藏の朝鮮東萊府使倭館接待圖十枚及び同進辰馬氏藏朝鮮信使江戸登行列圖一卷にして共に三浦博士の採訪に係り別に山城渡邊透守國氏藏の先代蟻州翁自筆朝鮮信使淀城下通過圖、行列圖、同信使先導宗

家行列圖、朝鮮人曲馬圖等あり史的にも美術的にも興味ある繪畫なるを以て注目を惹けり本會は陳列品中の一部を記念繪端書に收めて有志に頒てり來會者三百餘名に上り盛會なりき會員は更に席を階下の別室に移して晚餐會を開き九時散會せり出席者三浦教授今西助教魚澄中村古田牧下川富森桑原の諸學士岩橋梅原橋川原江藤中村井川勝峯末岡加藤佐古土田の諸君なりき

**例會** 十二月十六日午後六時より學生集會所に於て開催出席者三浦教授魚澄富森牧諸學士粟野橋川梅原原井川勝峯佐古の諸君にて左の講演あり十時散會せり

一、朝鮮の石器時代について 梅原 末治君

朝鮮石器時代遺蹟の分布を述べられたる後石器と關係

を持てる塚の形式及び支那遺品發掘に依る年代考より進みて支那文化が朝鮮石器に影響せし事情につきて細説せられたり

一、圓觀上人 粟野 秀穂君

曆應四年八月日三井園城寺に奉つた寄進狀の主沙門惠鎮が西教寺中興圓觀上人なることを確めたることより上人が南北合體に關して媾和使として奔走せしこと、後醍醐帝を始め奉り五代の帝師となりて圓頓戒を授け奉るに共に又武家にも信を得て尊氏の命を受け高時追薦の爲に圓頓法界寺を建て法勝寺を中興せる等その活動の多方面なることを挙げられたり

**例會** 一月二十七日午後六時より學生集會場に於て開催出席者三浦教授魚澄中村富森牧鈴木の諸學士橋川源江藤中村井川佐古の諸君にて左の講演あり十時散會せり

一、興正菩薩叡尊の自叙傳に就て 橋川 正君  
本誌に掲載せるを以て略す

一、諸國守護補任の勅許 文學士 法學士 牧 健二君

文治元治十一月頼朝に賜ひし補任諸國平均守護地頭の勅許は頼朝が天皇に對立する爲に得たるものに非ざる事を説明せられ次に頼朝が此時に總追捕使の勅許を得しやに關して(い) 總追捕使となりしは俗説をなすの說(星野博士等)(ろ) 總追捕使となりしをなす說(中田博士等)を擧げられ法制上にも信用すべき吾妻鑑等に斯る重要な記載なきを根據として後説の弱點を説破せられ前説に贊意を表されたり

一、存覺上人に就て 文學博士 三浦 周行君

鎌倉末期より南北朝にかけて父覺如を本願寺の中興となれる存覺が父より二回義絶せられし理由につきて從來より傳ふる一宗義上の異見説を二感情論の二説を擧げられ第一説を否認し第二説も真相に觸れずして當時の一般家族制度の罅隙に依る時代思潮を説かれ存覺は寧ろ受動的立場に立ちしも覺如に反感を有する田舎衆の輿望を荷ひしこゝが父子不和の眞因なりを斷じ而かも其事績は父子共に親鸞の超人格高調を宗義の普及に盡瘁し從來の東國中心宗門を京都中心宗門をなしたることに一致する

を指摘せられ日蓮宗が武家に頼れるに對して其公卿の助に頼れる差はあるも足利時代に至りて此兩宗が宗教界に駢馳するの基礎は同時に築かれたりを結ばる

例會 二月二十三日午後六時より學生集會所に於て開催出席者三浦教授下川中村富森の諸學士森下氏及び學生數名にして左の講演あり終つて今回舞鶴中學校長に新任せられたる下川學士の爲めに送別の意を表して十時散會せり

一、法然の布教態度を念佛停止の意義

井川 定慶君

先づ法然の淨土開宗の動機より布教態度に説き及ぼし墮落せる僧侶の惡行を舊佛敎の反感をより惹起されし幕府の念佛停止令が正治文曆二度のそれは惡僧取締なりしも貞應三年のそれは却て法然遺弟を庇護せしものなることを説明せらる

一、鎌倉時代の平民娛樂としての博奕

中村喜代三君

先づ鎌倉時代以前の博奕につきて述べたる後鎌倉時代

の平民間に於ける流行状態を説明し御家人の所領を賭物とする事によりて生ずる窮乏を最も重要視したりし幕府の取締方針及び處罰法を説き最後に當時の博奕の種類及方法に關する研究を述べらる

### ●支那學會

**例會** 昨年十月十二日午後六時より文學部第六教室にて開催左の講演あり十時散會せり

支那古代の地割ミ尺の長短を論ず

文學士 藤田 元春君

氏は先づ我國に存する尺に菊尺、文尺、曲尺、鯨尺の四種あることより隋書律曆志に顯はれたる十五等の尺を始め多くの古尺をすべてこの四種に分類すること同時に現行の支那内地に於ける地割の弓の長さより其の四種の尺の何れも猶用ひられつゝあることによりて古代の井田の大きさを述べそが二百四十歩を畝とする地割への變遷を考察し併せて朝鮮の地割ミ我國の地割ミを論じて其異同を明にせられたり

徐青籐の藝術

文學士 青木 正兒君

徐青籐名は渭字は文長、天池、田水月、の別號もあり浙江紹興府の人明の正徳中に生れ萬曆二十一年に七十三歳にて死す彼が頭角を著せしは浙江總督胡宗憲の力に負ふ所多く胡氏失脚後は半狂人となり妻を殺して捕へられ自ら墓誌を撰して自殺せむとして果たさず時に四十五歳なり後免れて南京北京に游歴し後郷に歸りて専ら書詩文繪畫に親しむしが畫ミ戯曲ミに最も長ぜしは周亮工などの指摘せる所にして朱竹垞亦彼の畫を賞揚せり戯曲の狂鼓史、玉禪師、雌木蘭、女狀元、小説の雲合奇蹤は尤も世に知らるる書は草書を能くし玄抄類摘の著あり畫は水墨花卉に於て殊に其の真趣を發せり云々

**例會** 十一月十五日午後六時半より文學部第六教室にて開催左の講演あり九時散會す

支那談

文學士 岡崎 文夫君

氏は大正八年秋以來支那各地を漫遊し具に彼地の事情を視察せられたる見地に立脚して支那共和國乃至支那史研究に就きて總括的論評を試みられたり

支那の酒に就いて 文學博士 高瀬武次郎君

博士は支那の酒は孟子離婁下篇に孟子曰禹惡旨酒而好善言こあるは記載に現るゝもの、中其の確實なるもの、最初なりと斷ぜられ杜康の造酒傳説、儀狄の傳説を縷述し更に遠く西洋古代に於ける造酒發明の事情を併せ述べ支那も西洋も太古に獨創的に發明したるものなるを推論し詩經商頌に見ゆる記載より之れが往昔に祭祀に缺くべからざるものなりしことを詳述せられたり

大會 十二月四日正午より京都帝國大學々生集會所階上に於て開催左の講演あり

一、連山攷

日名 靜一君

先づ周禮に對する自己の見解を明かにし大卜筮人の章を引きて出典を深り易及び連山の意義并に其の時代を推定し新舊唐志に見ゆる連山書の偽作なるを辨じ専ら隋唐以前の文献中周易以外の文句を輯集批判し左傳國語の之八及び漢書大玄御覽通志玉海唐六典に據りて連山占法を確立せらる

一、章學誠の學

文學博士 内藤虎次郎君

嘉慶六年の死より章學誠百二十年目に當る本年、章氏の學を紹介するの無意義ならざる所以より章氏の經歷其の時代環境を述べ其の名著文史通義が會通の立脚地に立ちて批判學の權威なること及び彼の地方誌編纂の見識を述べられたり

一、干支五行説と顛頊曆 理學博士 新城新藏君

干支五行の起原に就て飯島氏ミ所見を異にする所以を述べ飯島氏が五行は五星より起り顛頊曆は西洋曆法に法り干支は此の兩者の結合より戰國時代に起ることを謂ふに對し干支は殷代に五行は戰國の中頃時代に起り從つて顛頊曆は戰國の半頃以後に支那にて作られ秦漢時代に行はれたるものならむと謂ふ所見を論證説述し併せて左傳の歲星の記事に戰國の半頃紀元前三六五年頃の人が逆推して補入したるものならむを述べらる

一、支那古代の祭祀に於ける尸に就いて

文學博士 狩野 直喜君

儀禮の士喪禮既夕禮士虞禮等に夏祝、商祝の名あるより見て周代にも夏殷の風俗残り居りしものならむこと

を論證し禮俗の如きは皆其より前代前々代に起源を發するものなれば周代に於ける天子萬民共通の儀式なる篝火等の古風なることより尸の起原を詳細を禮記孟十の記事より推論し尸禮が支那未開時代の風俗なるを述べらる

午後六時講演終了來會者百三十餘名次で階下別室にて晚餐會を開き三十餘名出席午後九時散會せり

**例會** 二月二日午後六時半より文學部第六教室にて開催狩野内藤高瀬鈴木諸教授以下三十名出席左の講演ありて十時散會せり

一、王柏の學

文學士 神田喜一郎君

南宋の王魯齋の書疑九卷、詩疑二卷、魯齋渠二十卷によりて彼の學を考へ就中彼が書經全體に疑を挟みて先づ堯典の錯簡あるを論じて最も古しとし禹貢を以て之に亞がしめ洪範をは經傳に分割したる創見を述べ併せて詩經に秦漢間の竄入多く孔子刪定の舊に復せむとして淫詩三十二篇を削りし見解を縷述したり

一、伯夷列傳より見たる司馬遷の歴史觀

文學士 本田 成之君

司馬遷の學統及び環境を述べて彼が史記執筆の目的を縷述確證し其の不平を伯夷に托して立傳したるものにして伯夷傳の最も名文なる所以も畢竟彼が自己の人生觀を述べむ爲に苦心したる結果に外ならず云々

**豫饒會** 二月二十一日午後四時より京都帝國大學々生集會所にて開催、内藤、高瀬、鈴木、矢野、新城諸教授今西助教卒業豫定者、卒業生學生亡慮二十九名先づ撮影の後晚餐を共にし水野氏は白樂天の名に就て中村氏は其の研究組織を述べて卒業論文の一端を講演し周氏は日本人の有益なる東洋史研究が纏められたる著書となりて支那にても容易に觀得る様なされむことの希望を述べ九時散會せり

# 會報

關根 正直

退會

## ●會員動靜

入會

## ●寄贈交換圖書

東京市本郷區根津宮永町三五、竹澤方

三上 左明

親鸞上人眞像の研究

藤原 猶雪

東京帝國大學文學部史學科學生

丸山 二郎

金森氏雜考

押上 森藏

(右紹介者、中村直勝)

Tsang Pao XX (通報10)

Paul Pelliot

京都府舞鶴高等女學校

近藤 ひで

史學雜誌

三三の一、二、三

史學會

(右紹介者、桑原親通)

東京帝國大學文學部史料編纂掛内

西岡虎之助

歷史地理

三九の一、二、三

日本歷史地理學會

(右紹介者、花見朔巳)

岡山縣津山町大字吹屋町二

百濟 市郎

考古學雜誌

二八の一、二

國學院大學

東京府南葛飾郡瑞江村大字新堀、勝島寺

用口 聖爛

東洋哲學

二九の一、二

東洋大學

(右紹介者、那波利貞)

朝鮮京城旭町一丁目

阿川 重郎

經濟論叢

十四の二

經濟學會

奈良縣立畝傍中學校

山田安治郎

伊豫史談

二八

伊豫史談會

(右紹介者、三浦周行)

京都府立第三中學校

菅 貞好

(右紹介者、仁科貞人)